可茂農林事務所の普及活動状況　令和７年１月 31 日現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■農福連携推進関係者　農業と福祉の架け橋を目指して（「可茂地域農福連携推進会議）を開催）

可茂地域農福連携会議（事務局：可茂農林事務所）では、１月１７日に可茂特別支援学校を会場として「令和６年度第２回可茂地域農福連携会議」を開催した（第１回会議：９月６日開催）。

【校内視察（農園芸班室）】

当日は、同会議構成団体（市町村、ＪＡ、ぎふ農福連携推進センター、中濃圏域障がい者総合支援推進会議、農林事務所）等２１名が出席した。可茂特別支援学校から支援教育状況の紹介の後、同校教諭の案内により農業など多様な産業への就労に向けた生徒の実践的な作業学習状況について校内を視察し、出席者は教育機関の障がい者支援状況について理解を深めた。

校内視察後、管内の農福連携事例として、in Box 農園（八百津町）から「障がい者それぞれのペースに応じた働き方（出来高制の報酬）が紹介された。その後、農業経営課からの施策関連の情報提供、農林事務所からは農業・福祉双方の関係者のさらなる情報交換や相互連携を模索する場としての同会議の活用を呼びかけた。

農林事務所では、今後も同会議を継続的に開催し、農福連携に関する情報共有や連携機会の提供、福祉分野との相互理解促進に向けた活動を推進する。

（地域支援第一係）

■青年農業士・４Ｈクラブ　意見交流会で仲間づくり

可茂管内の若手担い手組織である可茂地区青年農業士会と可茂地区４Ｈクラブは１月23日、可茂総合庁舎で本年度２回目となる意見交流会を開催し、青年農業士３名と４Ｈクラブ員４名が参加した。

【いちごを評価する様子】

今回は、様々な品目の知識向上と仲間づくりを目的に、会員２名が自身の栽培品目であるいちごと鉢花を持ち寄って、参加者が試食や観察を行って評価した。消費者目線の意見や今後の販売方法について意見が交わされ、今後の経営力の向上に繋がる取り組みとなった。農林事務所は資料や会場準備、会の司会進行、補足説明を行い開催を支援した。

農林事務所は、今後も両会員のスキルアップや交流に繋がる活動を支援していく。

（地域支援第二係）

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■夏秋トマト　美濃白川夏秋トマト部会令和７年度栽培暦を検討

美濃白川夏秋トマト部会が 12 月 23 日、令和７年度の栽培暦検討会を開催した。栽培暦は、生育ステージごとの施肥量や病害虫発生に合わせた防除薬剤を行う上での基本となるもので、毎年、部会役員及び関係機関で見直しを行っている。農林事務所は、昨今の異常気象(高温、ゲリラ豪雨など)や栽培品種の切り替わり等を踏まえた施肥設計の見直し案と、国内での発生が確認され当地域でも被害が確認されている新害虫「トマトキバガ」への対応を踏まえた防除暦の見直し案を説明し、検討会で了承を得た。また、害虫

の薬剤抵抗性の獲得を回避するとともに、病害の薬剤耐性菌の発生リスクを下げるため栽培暦中に新農薬２剤を加えることとなった。

農林事務所は、２月に開催される部会研修会で栽培暦の変更点や注意点を説明するとともに、栽培期間中は各ほ場で助言を行い、部会員及び部会全体の出荷増加に向けた支援を行っていく。

（園芸産地支援係）

■堂上蜂屋柿　第 35 回品評会を開催　～堂上蜂屋柿は地域の宝・この柿を後世にも残したい～

美濃加茂市堂上蜂屋柿振興会は、例年１月に堂上蜂屋柿の品評会を行っている。第35回目となる今年は１月16日にシティホテル美濃加茂で開催され、振興会会員から44点が出品、ＪＡめぐみの組合長、美濃加茂市長、可茂農林事務所長や果実専門店社長など関係者が審査員として慎重に審査した。今年度は夏の猛暑や果樹カメムシ類の影響もあり、生産量はやや少なくなったが、出品された堂上蜂屋柿はいずれも出来映えは素晴らしく、甲乙つけがたいものであった。金賞などを受賞した蜂屋柿10点は、岐阜市内の果実専門店により高価格で買い取られた。

【上位入賞者と審査員】

今後も美濃加茂市の特産物として高い評価が得られるよう、農林事務所では現地研修会の開催など、産地の活性化に向けて支援を行う。

（地域支援第一係）